**②Ａ　（太田豊太郎とエリスとの愛について考察する活動）　　時間 ４０分**

**３年　組　　番　氏名**

以下に挙げた部分から、主人公のどのような心情が読み取れますか。また、主人公に**そのような心情が生じるに至った原因、理由、経緯**にはどのようなもの、ことがありますか、作品全体を踏まえ、記入欄に考えうるものをすべて箇条書き等にして書き出してみましょう。

また、こうした主人公の心情について、さらには、小説全体のなかでさまざまな変化を見せている主人公太田豊太郎とエリスとの愛あり方ついて、みなさんはどのように感じますか、グループで意見を出し合い、それらも記入欄にメモしておきましょう。

**「社の報酬は言ふに足らぬほどなれど、棲家をも移し、午餐に往く食店をもかへたらんには、かすかなる暮らしは立つべし。とかう思案するほどに、心の誠をあらはして、助けの綱を我に投げ掛けしはエリスなりき。彼はいかに母を説き動かしけん、余は彼ら親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合はせて、憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。」**　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（東京書籍『現代文２』一五一ページ）

し

記入欄

■主人公の心情

主人公太田の、エリスとの愛に満たされた日々の生活に満足している心情が読み取れる。エリスと太田は運命的な出会いの日より愛を育んだが、太田のエリスへの愛は、彼が官僚の職を解かれたのを機に急に強くなり、エリスも太田のために自宅に彼を住まわせるよう母に説得するなど太田への愛情を行動で示している。太田は友人の取り計らいで新聞記者の職を得たが、金銭的には生活は格段に苦しくなった。しかしそうした貧しい状況でありつつも、互いに愛し合っていることに、太田自身も満足し、心の安らぎを覚えているのである。

■原因、理由、経緯（箇条書きなどで書き出す）

１、帰宅途中偶然に何かに嘆き悲しむ少女に主人公太田が出会った。非常に美しい女性だと太田は感じた。

２、太田はあまりの不憫さゆえに思わず声をかけた（内気な彼が大胆に見知らぬ女性に声をかけ彼自身驚いている）。

３、少女エリスは、亡くなった父の葬式代がなくて困惑しているのであった。彼女は薄給の踊り子で、彼女を雇っている男に葬式代を求めたところ、「金は出すから俺の女になれ」のように言われ、途方にくれていたのであった。

４、そこで太田がエリスを助けた。持ち合わせの金がなかったため、腕時計を渡し、質屋で換金するよう言ったのであった。

５、その後、エリスが太田の下宿先に礼を言いに来た。エリスに住所を知らせておいたためであった。質屋に太田の住所を伝え腕時計を太田の自宅に持って来させ、質屋から時計を戻したいのだと、エリスに申し付けたのだった。

６、以来二人の交際は始まった。いやしき階層の生まれの教育のないエリスに太田は読み書きを教えたりもし、清廉な交際であった。

７、ベルリンの太田と同職のある人物が、太田が職務そっちのけで踊り子に入れ込んでいると本国に讒言し、太田は免職になった。

８、窮地に至りかえって太田のエリスへの愛情は燃え上がった。エリスも自宅に彼を住まわせるべく、彼女の母を説得した。

９、太田は友人相沢の取り計らいで新聞記者の職に就いたが、収入は相当に減った。

１０、しかし、そうした貧しい中でも愛するエリスと二人で暮らす楽しい日々に太田は満足しているのである。

■意見

●太田がエリストの暮らしに満足している様子は、これこそ本当の愛情だと思わせる。

●今まで勉強、仕事一筋だった太田にとって、初めての女性との生活のはずで、それ故に尚更感慨深いものであったろう。

●しかし逆に、初めて付き合った女性だ、ということが気になる。本当にその人の人柄を見極めて好きになったのか。エリスも、あまり男性に触れることもなく、たまたま助けてくれた男だから良く見えてしまっただけとは考えられないか。

●ただ、きっかけがどうであれ、時間の経過とともに男女の愛が深まっていく、ということはありうる。

●しかし、この後、太田はエリスをおいて日本に戻ってしまうのはけしからぬ。子供まで出来ていたのに。太田のエリスへの愛は本物とは言いがたい。エリスはずっと太田を思い続けているのに。

●エリスはそのショックで発狂までしてしまうが、そこまで彼女を追い込んだ太田の倫理的責任は重大だ。

●しかし、愛とはもともと移ろいやすいものである。ほんの一時であったにせよ、太田とエリスがつましいながらも愛し合って生活している一場面に、男女の愛の真実のようなものを見ることもやはり可能なのではないか。

●愛ゆえに傷つく、ということも愛の本質の一側面ではないか。そうすると、エリスを傷つけた太田はけしからぬが、愛それ自体については、こういうものもある、という本質的なものを描いているとも読める。

●それにしても、帰国を決めてからも太田はロシアから戻ってエリスと抱擁し恍惚としたりして、ふらついてだらしない。

**②Ｂ　（主人公にとって社会的地位・生活の安定とは何か、について考察する活動）**

**時間 ４０分**

**３年　組　　番　氏名**

以下に挙げた部分から、主人公のどのような心情が読み取れますか。また、主人公に**そのような心情が生じるに至った原因、理由、経緯**にはどのようなもの、ことがありますか、作品全体を踏まえ、記入欄に考えうるものをすべて箇条書き等にして書き出してみましょう。

また、こうした主人公の心情について、みなさんはどのように感じますか、共感できる部分、共感できない部分などについてグループで自由に意見を出し合い、それらも記入欄にメモしておきましょう。

**「嗚呼、独逸に来し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また機械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。」**

　　　　　　　　　　　（東京書籍『現代文２』一六二ページ）

記入欄

■主人公の心情

ドイツを訪れ、その自由奔放な空気、国柄に触れた太田は「今まで真面目一筋で他のものには目もくれず勉強、仕事にばかり励んできたが、それは親や上司の望みどおりに自分をとりつくろうとしただけで、そんなのは本物の自分ではない。本当はもっと奔放に生き、文学や歴史にも触れたりして、好きに振舞って本当の自分を探したい。」のように思うようになり、さらには現地の女性と交際することにもなる。その結果、中央省庁から免職を言い渡される。が、結局、友人の相沢に「このままドイツで卑しい身の女と将来の見えない暮らしをしていても仕方ない。君は仕事が出来るのだから天方伯に仕えて日本に戻るべきだ。」と説得され、結局そのとおり帰国する気になる。そうしてそのような状況になると、「ドイツで妙に開放的な気分になったのは一時の気の迷いであったのだろうか。また、結局自分は固い仕事をするのが運命であり、それが性にも合っているのか。」などと思い返し、複雑な心境になっているのが読み取れる。

■原因、理由、経緯（箇条書きなどで書き出す）

１、太田は幼少の頃より、予備校、大学時代まで常に成績が最優秀であり、中央省庁に就職した後も有能で上司の信頼も厚かった。

２、それ故ドイツ派遣を命じられるが、ドイツ国の自由奔放な雰囲気に触れ、親や上司の期待に沿うようにばかり振舞って来た今までの生き方に疑問を感じるようになる。

３、そのため仕事もいい加減になり、現地の踊り子、エリスと交際するようにすらなった。

４、こうしたことにより官僚の職を解かれてしまう。

５、友人相沢が新聞記者の仕事を斡旋してくれる。給与は格段に減ったが、エリスの家で太田はつましくも幸せに暮らした。

６、天方伯とともにベルリンに来た相沢謙吉が太田に、エリスとの関係を絶ち、帰国して天方伯に仕えよ、と説得する。

　　本人を説得するだけでなく、天方に太田のことを話したりして、実際にそうした環境を整えようと行動する。

７、天方のロシア行きに随行するなどして、太田は天方伯の信頼を得る。その後「君は有能だから日本で私に仕えてほしい。」と言われる。

８、人に強く言われると断れない性格もあり、また親類縁者のいない外国で身分の低い女性と暮らし続けることに不安を覚えたりもし、天方伯の申し出を受けて帰国すると返事をする。

９、結局、日本で固い仕事をするのが運命であり、それから逃れられないのが自分だ、と考えるにいたる。

■意見

●主人公は相沢の誘導があったから日本に帰るが、ドイツに来たときの自由に生きたいという気持ちがうそだったと言い切れるか。ただ、奔放に自分らしく生きる、ということは生易しいことではない。それは覚悟がいる。その覚悟がなかったところが太田の甘いところだったのでは。

●それも含めて太田は官僚などが向いていたということか。

●しかし、親類縁者が誰もいないベルリンで、エリスとの絆だけでこれから生きていかなくてはならないのか、という不安は相当だったとも思われ、太田の気持ちが理解できなくもない。故郷日本での安定した職業、というのは計り知れない魅力であったろう。

●しかしそのような安定など求めて何になるのか。エリスとの愛はどうなるのか。太田には新天地ベルリンで新たな生き方

　を切り開いてほしかった。

●確かに太田の弱さゆえの言動のようには思える。

**②Ｃ　（太田豊太郎と相沢謙吉の友情について考察する活動）　時間 ４０分**

**３年　組　　番　氏名**

以下に挙げた部分から、主人公のどのような心情が読み取れますか。また、主人公に**そのような心情が生じるに至った原因、理由、経緯**にはどのようなもの、ことがありますか、作品全体を踏まえ、記入欄に考えうるものをすべて箇条書き等にして書き出してみましょう。

また、こうした主人公の心情について、みなさんはどのように感じますか。さらには、人間にとって友情とはどのようなものであるか、真の友情とは何か、人間同士の友情は成立しうるのか、などといったことについて、この小説を踏まえたうえでグループで自由に意見を出し合い、それらも記入欄にメモしておきましょう。

**「嗚呼、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裡に一点の彼を憎むこころ今日までも残れりけり。」**（東京書籍『現代文２』一六八ページ）

記入欄

■主人公の心情

大学以来の友人相沢謙吉は、ドイツにいた太田が官僚の職を解かれた後、新聞記者の職を斡旋してくれた。また、太田が有能な人物であることを評価し、天方伯に引き合わせ、天方の信頼を得させて天方に仕えて帰国するように仕向けてくれた。これにより太田は母国日本で安定した職、地位につくことができ、とても相沢に感謝している。しかし一方で、エリスと太田の間を裂き、日本に帰る、と天方に太田が言ったことを、太田がエリスに伏せておいたにも拘わらず、太田失神中にエリスに話してしまい、それによりエリスは発狂してしまった。エリスとの関係を裂き、エリスの精神を破壊してしまったのも大田の目から見れば相沢である。そして、そうしたエリスのことで、本国への帰途にある太田自身も苦悩している。こうした点で太田は相沢を憎む気持ちを消去できないでいるのである。

■原因、理由、経緯（箇条書きなどで書き出す）

１、大学のときからの太田の友人相沢謙吉は、優秀な太田に一目置いていた。

２、太田豊太郎が、ドイツでの素行不良を理由に官僚の職を解かれると、相沢謙吉はそうした太田のために新聞記者の職に就くよう計らってくれた。

３、天方伯とともに相沢がベルリンに来ると、相沢は太田と面会し、太田が交際しているエリスとの関係は気の迷いであるから断ち切って日本に戻り、自らの能力を発揮して天方伯のもとに仕えるように心構えを持つべきである、と説得する。

４、天方伯のロシア行きに同行してベルリンに戻った太田は、天方から、「君は有能だから部下として仕えてくれ」といわれ、太田も受諾する。相沢の口ぞえもあったのである。

５、しかし、エリスにはそれが言えず、仕事を取るか、エリスを取るかでダブルバインド状態に陥り、途方にくれベルリン市内をさ迷い、やっとのことでエリスの待つ自宅に着くと、倒れて気を失い、そのまま数週間寝込みうなされる。

６、太田が意識を失っている間に、相沢が太田の家に来て、エリスに対し、①太田は相沢にエリスと別れると約束したこと、

　　②天方伯の誘いに太田が応じ、帰国して天方伯に仕える予定であること、をエリスに話してしまう。

７、相沢がエリスに①②を話すことで大田に裏切られたと思ったエリスはショックで発狂する。

８、しかし太田は結局帰国するのである。異郷の地でどのように暮らしていこうかという不安も持っていた太田が帰国して名誉ある安定した地位に就くことになったのはひとえに相沢のおかげであり、太田は相沢に非常に感謝している。

９、しかし、エリスを不幸な目にあわせ、さらにそれにより太田本人も精神的に苦しんでいるのは、太田の目から見れば相沢のせいであり、相沢がエリスに余計なことを言わなければこうはならなかったのだ、という相沢に対する恨みを若干持っているのである。

■意見

●優柔不断な太田豊太郎がすべて悪い。それを、相沢を恨むなどもっての外で、太田は最低である。そんな太田なのに、自ら進んで彼を救おうとした相沢の友への思いは崇高である。相沢の友を思うこうした友情こそ本物で美しい。

●相沢は太田の優秀さを熟知しており、それを日本社会に生かすのが正義だと考えたのであろう。

●いや、相沢は介入しすぎである。人間は太田のように、時に道を踏み外したり、紆余曲折を経験したりする。それで、本人が助けてほしい、と言ってきたのならともかく、頼まれもしないのに太田に帰国を促す活動を陰に日向に行っており、これは太田の個人的問題にまで踏み込み、彼に人格にまで立ち入った行過ぎた行為だ。

●頼まれても、困っている友人に一々助けの手を差し伸べていたらきりがなく、それでは身がもたない。大人たるもの、軽々に人のことに立ち入るべきではない。

●そんなことは相沢は分かっていたはずだ。それでも救いたいほど太田の才能は豊かで、しかも相沢自身それに心酔していたのではないか。やはり、そこに真の友情を感じることが出来る。憎まれてもよいという覚悟もあったか。

**③　　　３年　組　　番　氏名**　　**時間 ４０分**

小説中に描かれている以下のＡ～Ｄのうち、人間にとって最も大事なものはどれだと思われますか。作品の内容を踏まえて、理由・根拠などとともに、以下の記入欄にグループとしての見解をまとめましょう。なお、その際、②Ａ、②Ｂ、②Ｃでそれぞれ話し合われたこと報告しあい、それらを踏まえましょう。また、理由・根拠は、なるべく多くの人を、なるべく強く説得できるものにするように心がけましょう。

**Ａ　太田豊太郎とエリスとの間に描かれていたような、男女の愛。**

**Ｂ　太田豊太郎が、一度は否定しながら回帰していった、社会的地位・生活の安定**のようなもの。

**Ｃ　太田と相沢との間に描かれていたような、人と人との友情。**

**Ｄ　その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）**

記入欄

■最も大事なもの

　　**Ｂ**

■理由・根拠

１、「ちぎり来なかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」と古歌にあるとおり、いくら強く愛し合っていても男女の恋は当てにはならない。それゆえ、いくらその時エリスと太田との恋が強力であっても、それが永遠に続く保証はなく、それよりも太田が誰も親類のいない遠い異国の地から故郷日本に戻り、天方伯に仕え名誉ある地位に就こうとしたのは人として著しく妥当性を欠いたこととまでは言えない。太田にそれを勧めた相沢の振る舞いも是認できる。

２、ただ、太田について言えば彼の大きな難点は優柔不断で決断力がないことであった。複雑な人間関係を上手く切り抜けることも出来ない人である。それがエリスを傷つけた原因である。太田自身もそれは反省していて、サイゴンの港でも悩んでいるようではあるが、エリスのためにも今後ともその苦しみを忘れずに反省し続け、そしてその上で、天方伯のもとで、世のため人のため一生懸命働いてほしい。

３、ベルリンにいた太田が再び安定した名誉ある地位を求めようとしたのは不当とまではいえない、と１で述べた。しかしながら、もちろん、地位・名誉を求めることが常に美徳である、とは限らない。『白い巨塔』や『沈まぬ太陽』ではないが、なりふり構わず人を蹴落とし、手段を選ばず権力闘争に明け暮れるのは良くない。しかし、太田は、人間関係が不器用ではあるものの、基本的に真面目であり、地位に安んじて利権をむさぼるタイプでなく、おそらく自分の類まれな能力を生かし一生懸命職責を全うしようとしたであろう。そうした人材を生かすのは社会全体にとっても利益になるのであり、社会の正義にかなっているのである。

４、人は、私利私欲で行動するのでなく、他者のために、社会のために、そして世界のために働いてこそそれなりの地位、名誉に浴するのである。太田には、きっとそれが理解できるであろうし、今後そうした仕事を彼がしてゆくと信じてやりたい。

５、友情、愛情、という問題について言えば、右のように、それなりの責任ある地位にあって、とにかく他者のために尽くして仕事をしていく中で、逆にそうした人と人の絆を強める愛や友情などの感情が事後的に生じてくるとも考ええるだろう。愛や友情が他に先んじて確乎として存在し、そのために仕事など他のものを犠牲にする、というのはこうみると本末が転倒している、とも考えうる。

６、もちろん、他人のために尽くす、といっても、何が他人のためかは簡単には見極められない。現に太田豊太郎は、エリスという他者のために尽くし、彼女を庇護しようとして、逆に彼女を傷つけてしまったのである。他者のために尽くす、ということはどういうことか、どのような行動が、判断が、振る舞いが正義であり、美徳であるのか、太田豊太郎にも考えてほしい。繰り返すようだが、それが唯一エリスに報いる道であろう。

７、私たち読者も、そのように、他者のために尽くすとはどういうことか、正義とは何か、これを機に考えたい。そして、そうした正義、美徳を具現化する手段として、それなり能力を持った人物に相応の社会的地位が与えられると心得たい。正義の実現、それは容易ではないのはすぐに分かる。世の中は悪徳、裏切り、不道徳に満ち溢れているからである。しかし、そうした中でこそ、やはり社会をよりよくするべき場所として、名誉ある社会的地位があるのであると考えたい。そうした職業は結果的には比較的安定した仕事だといえる。しかし、安定し、変化を失ったときに、人は上記のような重責は果たせなくなる。勇気と決断力を持って常に変化を求め、社会をよりよくする人材を多く求めたいものではある。

　　そのための社会的地位は何にも増して重要だ。